uicc-Japan
Japan National Committee for UICC

国際対がん連合
Unio Internationalis Contra Cancrum
Union for International Cancer Control

UICC-ARO
UICC ASIA REGIONAL OFFICE

UICC日本委員会 ニュースレター
Japan National Committee for UICC

No. 24
July, 2019

事務局 公益財団法人がん研究会　がん研究所
〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31
Tel:03-3570-0542　Fax:03-3570-0546
uiccjapan@jfcr.or.jp

ごあいさつ

野田　哲生
UICC日本委員会　委員長
がん研究会がん研究所所長

UICC日本委員会ニュースレター№24発行に先立ち、一言ご挨拶申し上げます。

2018年から2019年にかけてUICC日本委員会（以下、当委員会）は多くの方々からのご支援・ご協力を頂きながら活動を行って参りました。

昨年2018年11月にはUICC会長であるヨルダン・ハシェミット王国王女ディナ・ミルアド妃（Her Royal Highness Princess Dina Mired of Jordan）が来日されました。日本滞在の間、会長は日本記者クラブでの当委員会主催による来日記者会見や多くのステークホルダーの方々とミーティングを重ねるなど精力的に活動されました。最終日には当委員会幹事メンバーとの懇談会を行いましたが、日本におけるUICC活動をアピールするまたとない機会となり、会長との貴重な時間を共有し、親交を深めることができました。

また、毎年2月4日のワールドキャンサーデーでは昨年同様、カレッタ汐留にてライトアップイベント「LIGHT UP THE WORLD」を開催致しました。UICC本部は2019年から3年間の対がん運動キャンペーンとして「I AM AND I WILL－私は今、そしてこれから私は」をテーマに掲げており、このテーマに基づき、当委員会は、がん治療・予防の専門家、がんサバイバー、がんサバ

イバーを支える方々を集め、自らの置かれた立場を踏まえ、自分はこれからどのようにしてがんと向き合っていくかを語り合い、発信する場を創造していきたいと考え、イベントを企画・構成しました。今回は初の試みとして特設WEBサイトを開設し、SNSキャンペーンも展開しました。SNSで「#WorldCancerDay」「#IAmAndIWill」とタグ付けて投稿頂いたメッセージは、UICC本部WEBサイト内のソーシャルウォールに自動的に掲載されるようにしました。（参照：URL https://worldcancerday.jp/）このイベントの模様は多くのメディアに取り上げられ、UICC並びに当委員会のプレゼンスを高める絶好の機会となりました。

TNM委員会としては、2017年末には、TNM委員らのご尽力により、7年ぶりに「TNM悪性腫瘍の分類第8版」の改訂版が金原出版より発刊されましたが、こちらも順調に版を重ねており、多くの医療関係の皆様から好評を博しております。

UICC-AROは、昨年本部との間でMOUを新たな時代に向けて結びなおすこととし、アジアにおけるUICC活動を推進していく役割について、協議を重ねたうえで書面にて取り交わしました。これまで、アジアのがんのユニバーサルヘルスカバレッジについて、内外の知見を積み上げてきたことを背景に、昨年はこのテーマについて、日本癌学会インターナショナルセッション、日本癌治療学会シンポジウム、UICC世界癌学会UICC-AROセッションにて議論する機会をもちました。そして新たに、UICC-AROは、アジアのがん医療におけるUHC実現にむけた取り組みについて話し合い、その実現への道筋をつけるための場として、官民のマルチセクターが集まるアジアがん官民対話フォーラムを2018年4月と9月に開催しました。4月に開催した第1回アジアがん官民対話フォーラムの議論を軸に、2018年7月に閣議決定された「アジア健康構想に向けた基本方針」の中に、がんについての提言内容が文言として盛り込まれていることをお伝えしておきます。

上記の活動の詳細は本紙の中でも、それぞれ詳しく記載されておりますので、是非ご覧ください。

末筆ではございますが、長年、当委員会の監事をお務め頂き、また、施設会員である東京慈恵会医科大学を代表して会議等にもご参加頂いておりました 髙木 敬三 先生が昨年7月29日にご逝去されました。当委員会への多大なる貢献に感謝申し上げますとともに、ここに黙祷を捧げ、お悔やみ申し上げます。

以上

CONTENTS

挨拶 ……野田 哲生 1
UICC会長ディナ・ミルアド王女が来日 ……北川 知行 3
第50回国際小児がん学会（SIOP 2018：京都）を終えて ……中川原 章 5
第77回 日本癌学会学術総会：UICCシンポジウム講演
「日本におけるがん対策」 ……丸山 慧 9
2018-UICC世界がん会議報告（クアラルンプル:2018年10月1～4日）
“Strengthen Inspire Deliver” ……田島 和雄 10
アジアがん官民対話フォーラム：
アジア健康構想に対するAROの取り組み ……赤座 英之 12
「日本対がん協会とがんサバイバー支援」 ……垣添 忠生 14
大阪国際がんセンター3年目の春 ……宮代 勲 18
東札幌病院とUICC ……石谷 邦彦 16
ワールドキャンサーデー'19での新たな誓い ……佐々木昌弘 17
ワールドキャンサーデー ……知原 修 18
世界とつながろう ワールドキャンサーデー ……河原ノリエ 18
UICC 日本委員会加盟組織 ……20

UICC会長ディナ・ミルアド王女が来日

UICC日本委員会名誉会員
北川　知行

UICC会長のヨルダン・ハシェミット王国王女ディナ・ミルアド王女（Her Royal Highness Princess Dina Mired of Jordan）が、11月16-19日に京都で行われた国際小児がん学会（中川原　章会長）に招待されて来日、その後UICC活動のため上京されました。

王女はがんサーバイバーの母

王女は、1997年にご子息が急性リンパ性白血病に罹患するという大きな試練を受けました。当時ヨルダンでは治療ができなかったので、イギリス、次にアメリカで骨髄移植を含む治療を受け、幸いにしてご子息は完治しました。がんサーバイバーの母となった王女はその後、対がん運動、特に開発途上国の小児がん患者の救済に深い関心を持ち、2003年にはヨルダンのフセイン国王がん財団の会長に就任、以来財団の資金獲得やさまざまな中近東における対がん運動に挺身してきました。2016年にUICCの次期会長に選出され、2018年会長、22年からは前会長として6年間理事としてUICCの発展のために活動されることになっています。

東京では、11月19-22日の間に、Universal Health Coverageやアジア健康構想の実現に向けて活動する武見議員、西村厚生副大臣および製薬会社や企業の幹部との会見、日本記者クラブで記者会見、朝日新聞とのインタービュー、婦人画報誌の取材などなど忙しいスケジュールをこなされ、最後にがん研究会を訪問されました。

がん研吉田富三記念講堂で講演

がん研では、病院の新しい治療施設や緩和病棟などを興味を持って見学、当日行われたUICC日本委員会幹事会のメンバーと昼食会、その後吉田富三記念講堂で「UICCが目指すもの」という題で演説されました。

司会の北川前委員長は、“50余年前に吉田先生を

UICC-Japan 幹事会メンバーと

組織委員長として東京でUICC国際がん会議が持たれ、その成功がその後の日本のがん研究の飛躍とがん研究会の発展につながった歴史を思うと、本日ここ吉田記念講堂で、ディナ王女がUICC会長として演説されることは大変意義深い”と歓迎の辞の中で述べました。王女は、UICCの現勢力、活動目的および活動計画につき力を込めて話をし、満員の観衆に感銘を与えました。続いて野田委員長が「UICC日本委員会の歴史と使命」の題で講演しました。

ディナ王女は、誠に気さくで活動的な方で、上品ではありますが、Her Royal Highness Princessなどという肩書きはなしにDinaと呼んで話をしたい誘惑にかられる方でした。中東国家からの初めてのUICC会長であり、今後世界の対がん運動とUICCの発展のために大いに活躍していただける方と期待されます。

ディナ妃による講演

当日の記者会見の様子

Access Accelerated担当者と懇談

根本匠厚生労働大臣を表敬訪問

講演会に出席した人々

第50回国際小児がん学会（SIOP 2018：京都）を終えて

第50回国際小児がん学会国内委員会
委員長　**中川原　章**
（佐賀国際重粒子線がん治療財団 理事長、佐賀県医療顧問）

平成30年11月16日より19日までの4日間（前日、1～3日目）、秋の紅葉で彩られた京都市「国立京都国際会館」において、第50回国際小児がん学会（SIOP 2018）が開催された。天候にも恵まれ、静かな佇まいの最高の環境の中で、過去最高の世界90カ国から2,500名が参加し、地球上の小児がんの様々な問題について大変有意義な討議が行われた。

ちなみに、国内からの参加者数は660名であった。また、今回の特徴は、中国、インド、韓国などアジア諸国からの参加者が大幅に増加したことであった。20年前（1998年）に横浜で開催した第30回国際小児がん学会の際の参加者数が1,000名であったことを考えると、隔世の感がある。

今回の参加者数の増加に伴って、国際小児がん学会の正会員数も1,500名と大幅に増加し、1位の米国に次いで日本が50名から112名に増加して2位となり、次いで中国、インドとアジア勢が上位を占めた。

開会式

開会式では、国内組織委員会（LOC）委員長であるDr. Akira Nakagawaraと、SIOP会長であるDr. Eric Bouffet及びScientific Committee委員長のDr. Stephen Hungerの開会挨拶のあと、次の5名から来賓祝辞をいただいた。

1. Mr. Daisaku Kadokawa; Mayor of Kyoto（代理:村上圭子副市長）
2. Dr. Yoshitake Yokokura; President, Japan Medical Society & Past-president, World Medical Society
3. HRH Princess Dina Mired （Jordan）; UICC President, A mother of childhood cancer patient
4. Mr. Andre Ilbawi; World Health Organization （WHO）
5. Mr. Takumi Nemoto; Minister of Health, Labour and Welfare of Japan（代理:鈴木俊彦事務次官）

また、開会式直後のセレモニーでは、可愛い子ども太鼓のあと、スーパーキッズオーケストラによる素晴らしい演奏が行われ、5歳で発病し16歳で脳腫瘍のために亡くなった加藤旭君が作曲した2曲が奏でられた。その時のスクリーンに流れる旭君の、家族と友人の愛に包まれた厳しい闘病生活が参加者の感動を誘い、最後に参加者全員が起立して合唱したYou raise me up!は、毎年世界で新たに小児がんに罹患する約30万人の子どもやその家族のために、皆が力を合わせて闘うことを誓う祈りの歌となった。

式典後に展示会場で行われたセレモニーでは、第

Akira Nakagawara（President, LOC, SIOP2018）　Eric Bouffet（President, SIOP）　HRH Princess Dina Mired（President, UICC）　Andre Ilbawi（WHO）

Asahi Kato, the patient passed away

Singing a song “You raise me up!” together

Cake cut for celebrating the 50th anniversary

Taking a photo with slime

50回大会を記念して、SIOP幹部による大きなケーキカット式が行われた。ちなみに、初日に、前SIOP会長のProf. Giorgio Perilongoが「SIOP50年の歴史」と題して記念講演を行った。

充実したプログラム内容

SIOP本体が企画したのは、8つのKeynote Lectures, 10 Symposiums, Free Paper Sessions, YI (Young Investigator) MTE (Meet The Experts) Session, YI Scholarship Award Session, Poster discussion, MTE Tumor Boardであった。その他に、LOC Educational Sessions, 国際小児外科腫瘍学会 (IPSO), 国際小児がんの会 (CCI), 国際小児放射線腫瘍学会 (PROS), 小児精神腫瘍学会 (PPO), 国際小児がん看護学会 (Nurses) の各セッションが並行して組まれた。

その中で、圧巻はやはり2人の日本人ノーベル賞受賞者（大隅良典教授:Autophagy、本庶佑教授:PD1,

Prof. Y. Ohsumi and the SIOP stuffs

Prof. T. Honjo on presentation

CCI Session

CCI leaders; CCI Opening Ceremony

PD-L1）の講演であった。ちなみに、SIOPでのノーベル賞受賞者の講演は今回が初めてのことであった。

特に、本庶教授は1ヶ月前の10月に受賞が発表され、12月の受賞講演の前の学会レクチャーであったので心配したが、素晴らしい講演をして頂き、講演後は50年の学会歴史上初めてのスタンディングオベーションが起こった。

この他に特記すべきは、Keynote （D'Angio）Lecture: Dr. Tatsuya Ohno; “Heavy Particle Radiotherapy”で、会場に参加していたLancet誌のエディターから早速大野先生に原稿依頼があり、その内容が本年4月のLancet誌に掲載された。恐らく我が国の重粒子線がん治療の成果が世界のトップジャーナルに掲載された初めてのものになったと思う。

ちなみに、Dr. Dan D'AngioはSIOP創設期のリーダーの一人で、欧州を基盤として立ち上がったSIOPを世界のSIOPへと育て上げた人物の一人でもある。そして、不肖私の恩師でもあった。2017年のSIOPでLifetime Achievement Awardを受賞された後、昨年9月、夢であった京都の第50回大会を前に亡くなった（享年96歳）。

“WHO Pediatric Cancer Initiative”

今回のSIOP総会での重要なイベントは、WHOが昨年発表した「WHO Pediatric Cancer Initiative」であった。現在、世界のLow～Lower middle income countriesはアジアとアフリカに集中しており、それらの国では、治療放棄、治療中止、治療による死亡、未受診などの率が高く、治癒率は10～30%と言われている。このような実態を憂慮し、昨年1月、SIOPはNCDとしては初めてWHOと協力協定を結ぶことに成功した。

そして、目標を「2030年までに世界の小児がん治癒率を60%まで引き上げる。」と宣言した。すでにその具体的な動きは始まっており、St. Jude Hospital

Kagami-Wari at Networking Event

A message from Prof. Masera

がWHOに巨額を拠出し、今年になってトランプ米国大統領も小児がん対策として大きな予算を追加拠出している。

この内容の説明が、本学会に来賓として参加したWHOのMr. Andre Ilbawi氏からSIOP幹部へ行われ、共同して行う対策の戦略が協議された。これには、現UICC会長で小児がんの子どもの親であるPrincess Dinaさんも積極的に参加され、実質的にWHO-SIOP-UICC-UNが連合してこのInitiativeを成功させる体制が整いつつある。

大好評だった日本式「おもてなし」

今回のSIOP総会における特徴の一つは、日本のボランティアパワーがフルに発揮されたことであった。先ず、LOCとして国内で集めた寄付金の多くは個人ボランティアや小児がんに関係するNPO法人からであった。

20年前の横浜SIOPではそのようなことはほとんど無かったので、この間における日本人の絆や助け合い、思いやり等に関する心情や考え方が随分変化してきていることを痛感した。バブル経済崩壊後、幾多の大災害にも耐え、日本人の心が着実に成熟してきていることを実感した寄付集めであった。

さらに、学会当日の開会式後のイベントやネットワーキングイベント（会員懇親会）では、がんの子どもを守る会を中心とする我が国の小児がんボランティアグループが一丸となり、渡辺和代さん（ACCL代表）をリーダーとして緻密な企画、演出をしていただいた。

その結果、海外からの参加者のほとんどから、これまでの学会の中で一番素晴らしかった、ありがとう、と多くの賛辞をいただくことができた。

学会終了後、UICC会長のHRH Princess Dina Miredさんは京都から東京へ向かわれ、UICC日本委員会との交流会に参加された。また、この学会で Lifetime Achievement Awardを受賞したProf. Giuseppe Maseraから、会員懇親会で撮った和太鼓の写真と共に、"What we have learned"として大変力強いメッセージをいただいた。

第77回　日本癌学会学術総会
UICCシンポジウム講演

「日本におけるがん対策」

厚生労働省健康局がん・疾病対策課　がん対策推進官
丸山　慧

がんは、生涯を通じて2人に1人が経験すると推定されており、国民に与える影響の大きい疾患である。がんの5年生存率は年を経る毎に改善しているが、がん種毎に見れば、前立腺のがんのように100%に近いがんから、膵臓がんのように10%を切るがんまで多彩であり、状況に応じた対策が求められている。

日本は国民皆保険を1961年に達成し、がん対策を求める機運が1980年代頃から高まった。これはがんが死亡原因の1位になった（1981年）ことも一因として考えられる。1984年以降は3度に渡り、「対がん10カ年総合戦略」が策定され、研究・予防・医療の向上が図られてきた。

一つの大きな転換点は、2006年にがん対策基本法が成立し、国の責任で基本計画の策定及び計画に基づく各種施策が強力に推進されるようになった時である。全国どこでも質の高いがん医療を提供することができるよう、がん医療の均てん化を目指し、がん診療連携拠点病院の整備が進み、拠点病院のない二次医療圏は着実に減少してきている。また、基本計画の履行により、拠点病院への放射線治療機器の設置、緩和ケアの推進等が図られた。小児がんについては、新規患者が年2500例程度と少なく、質を担保する観点から、一定の集約化が必要であり、全国に15の小児がん拠点病院が整備されている。

がん対策基本法は2016年に改正され、がん患者の就労やがん教育が新たに施策課題として明示され、第三期がん対策推進基本計画にも取り上げられている。

がん登録等の推進に関する法律が2016年元旦より施行された。これまでの地域がん登録の流れをくみ、全病院でがん登録が義務化された。今後国民のがんにかかるデータが精緻化され、日本のがん対策に活かされることが期待される。

日本の保健システムの将来構想として保健医療2035を公開し、健康を通じて世界をリードしていくビジョンを示している。また2015年のランセット誌の安倍総理の寄稿において、世界中の人が基本的な医療の恩恵に預かれ、平和でより健康的な世界を目指す旨の意思表明がなされた。今後日本としてもUHCに取組む各国を支援して参りたい。

日本の癌医療について英語でプレゼンする
丸山　慧がん対策推進官

座長は、野田哲生UICC日本委員会委員長と
トーマスクエニーIFPMA事務局長　が行った

2018-UICC世界がん会議報告
（クアラルンプル:2018年10月1～4日）

“Strengthen Inspire Deliver”

UICC日本委員会名誉会員
田島　和雄

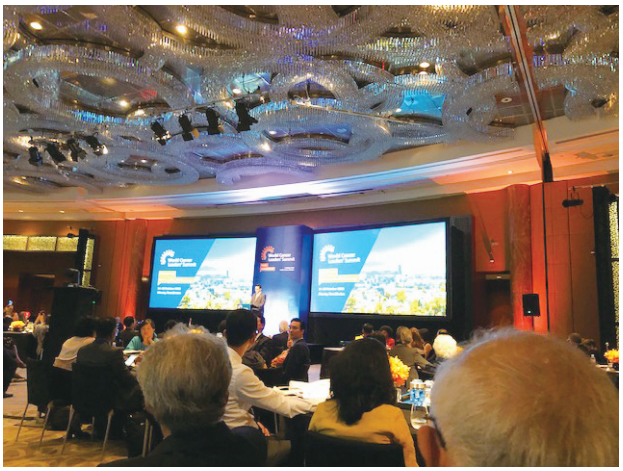
World Cancer Leaders'Summit
（10月1日、9:00～16:00）

開会に当たり今回のサミットの主催者が主題、“Cancer Treatment for All”について述べ、世界で増加しているがん患者の適切な治療を進めていくためには、各国のがん対策計画の改善とがん医療のための基盤整備が不可欠であることが強調された。

本サミットは基本的に二つの課題について2～3時間をかけ、各テーマに関する基調講演、世界の開発途上国の行政官に対する関連問題に関するインタビュー、続いて数名の専門家によるパネル討論会形式で開催された。進行役は放送会社などの慣れたスタッフが務めており、聴衆も興味深い進行と議論を楽しむことができた。

第一に、旧理事長、新理事長、WHOスタッフの基調講演に続き、世界のがん流行サーベイランスの現状についてIARCのフレディー・ブレイ室長が基調講演をした。それに対し、メキシコや太平洋地域の専門官が国の現状についてインタビューを受け、パネル討論会ではインド、マレーシア、WHO、製薬会社などの専門家が加わり、さらに掘り下げた議論がなされた。

第二に、昼食を挟んで、マレーシアの国立がんセンターのサウンタリ・ソマスンダラム総長（UICC理事）が、基調講演で各地域におけるがん医療の不平等性に関する理解と対処について述べ、続いてフィリピンの Global Health Initiative 長官の特任大使としてスーザン・メルカドがフィリピンにおける本題に関する法的整備から実践についてインタビューを受けた。さらに、パネル討論会にはガーナ、バリアン社などの専門家が加わり、追加討論がなされた。



リーダーズサミット会場

最後に前回に続いて本サミットの閉会に当たり、IARCのクリストファー・ワイルド所長が、世界のがん問題への対応:成功と失敗、について述べた。

UICC総会
（10月2日、18:30～21:00）

サンチャ・アランダ旧理事長から前回の総会（2016年10月、パリ）の議事録の説明があり承認された。また、過去二年間におけるUICCの動向について述べられた。特に、彼女は「がんは全世界で問題となっているが、特に低/中収入国では社会経済的基盤が不備で、国民に適切ながん治療を提供するために苦闘しており、そこにUICCの果たすべき役割がある」ことを強調していた。新理事長のディナ・ミレド氏（ヨルダン王妃）に所信表明があった。

ケリー・アダムズCEOからUICCの活動報告、特に過去二年間（2016-18年）の詳細な活動報告がなされた。今回のがん会議は、120ヶ国から2,560代表が参加しており、5トラックに別れて700課題（抄録数）について討議された。また、UICC活動をさらに浸透させていくために初めて設立されたUICC Awards（5種類:CEO、Advocacy、Collaboration、Fundraising、World Cancer Day Spirit）が紹介され、世界各国で活動している組織が表彰され、今回のハイライトともなった。

UICCの新理事、次期理事長の選出のための投票（Full Members）が総会前に行われ、総会において結果報告があった。14名の新理事、アジア地域

から2名（中国、香港）が選出され、次期理事長としてアニル・クルズ氏（インド）が選出された。

UICC-AROセッション
（10月2日、13:10〜14:10）

UICC-AROによるUHCに関するセッションが組まれ、赤座英之UICC-ARO代表と田島和雄が進行したので簡単に紹介する。本セッションには世界を代表するUHCに関する3名の演者が招待されており、最初に赤座代表が本セッションを企画した経緯、および国際的なUHCの質的向上の重要性について紹介した。

最初の演者としてWHOを代表してアンドレ・イバウィがん対策官が、UHCの質的向上はWHOにとっても重要な課題であり、開発途上国におけるがん医療を充実していくために各国における必要な予算配備が不可欠であり、特に早期診断・治療、ワクチン摂取による予防対策の重要性を強調し、WHOが先頭を切って開発途上国のUHC改善に取り組んでいくとの豊富を述べた。

次に、IFPMA（世界で50社が参加）のトマス・クエニ長官が製薬会社の果たす役割について述べ、今や開発国では6〜7割のがん患者が救われている現状を開発途上国に広げていくためには、医療保険による自己負担を減らす工夫が必要であり、製薬会社が開発途上国のUHC向上に貢献できる方向性を考慮すべきであると述べた。最後に、アステラス製薬株式会社のピーター・サンダー氏は、会社を代表する意見ではなく私見であることを断り、がんに対するUHCを現実的なものにするためには官民協調をさらに進めるべきであり、アジア地域では製薬会社がん患者支援プログラムを進めており、そこでは資金援助のみならず、がん患者や医療専門員への適切な教育支援にも努めているなどについても紹介した。

最後に田島がアジア地域においてUHCを発展させていくための6項目の基本的問題、特に環境、文化、社会的環境の違いを凌駕していくための企画が必要であると述べた。

アジアがん官民対話フォーラム：アジア健康構想に対するAROの取り組み

UICC-ARO　Director
赤座　英之

2018年7月に内閣府は、アジア健康構想の基本方針（改定）[1]を公表した。その中で、「がんに関するデータベースの共有に向けたレジストリー制度のハーモナイゼーション等、疾病毎に包括的な検討を行う官民のプラットフォームの設置を検討」と記載されている。

高齢化が進むアジアの中で、今後、急激に増加するであろう「がん」症例をアジア諸国がどのように克服していくのかという課題に対して、我が国の知見を活用し貢献するためには、まず、それぞれの国、あるいは地域の現状と課題を正確に把握することが必要であり、そのためには、がんに関する情報を整理し的確な目標を策定することが重要である。

がん医療現場でのデータベースを整備しそれを共有をするためには、レジストリー制度を各国共通あるいは各国で比較検討できる形にしていくことも一案である。

人口の高齢化とともに、がんは確実に増加する。アジアの国々が今後増大していく「がん」を如何に予防できるか、また、如何に早期に診断し、効果的に治療できるか、その後の支援の方策を確立するためにも的確な状況把握と、それに基づく課題の整理が重要と考えられる。

アジアの国々の経済発展が著しいとはいえ、他の高所得国に比して未だ医療資源が不足している状況に変わりはない。そのような状況は、アジアにおいて、各国間のみならず、国内における医療格差を拡充する要因ともなっている。アジアにおいて、Universal Health Coverage（UHC）の実現が重要な課題の一つである所以である。

限られた医療資源の中で、日本型のように医療体制を一律に構築することが困難であるなら、当面、何を優先順位としていくべきか、どこに優先的に医療資源を充てるべきかの検討が必須である。

また、各国ごとに医療経済のシステムや医療供給体制も異なるところ、カスタムメイドにその国に合った対応策を共に検討していく必要があり、また、これは、今後急激に増大する医療支出が国家予算を圧迫するであろうことを考えた時に、国家が政策として考えるべき重要事項であることは明かである。

これは、単に日本からアジアに向けた発信（貢献）のみならず、そのアウトカムが日本国内の課題解決にも大きく寄与するものでもある。

AROが事務局的役割を担って行った二度にわたるアジアがん官民フォーラムは、以上のことを念頭にしたものである[2,3]。この会議を通して感じられたことは、官民の共通基盤作成が考えるほど簡単ではないという印象である。言うまでもなくセクターとしての“官”と“民”は、立場が異なる。

また、民には、製薬をはじめとした関連企業とアカデミア（がん関連学会、大学などの研究機関）、そして病院、患者など、時にはそれぞれ互いに拮抗しあうセクターが含まれる。アジア健康構想という海外支援政策という枠組みに、これら多くのセクターが共通のコンセプトを共有することは不可能に近いのではないか?という焦燥感を禁じ得ない。

だとすれば、互いの利害関係の近いセクターの集団が、議論しあい共有できる動機付けを見出し、さらに、利害関係が異なるセクターの集団間で議論を積み上げてゆくことが重要である。

第一回の会議[2]では、多くのセクターからアジアに向けた医療貢献に関する意義とその実態が議論できた。そして、第二回の会議[3]では、議論の的を絞り、主に製薬企業と官のアジアに対する医療貢献に対する動機付けを対比しつつ、互いが WIN-WINの関係を築くための要件が議論された。ここでは、製薬企業と官との関係が必ずしもWIN-WINの関係にはなっていないことが話題の一つになった。

がんにおけるUHCの達成は、単にトップ・ダウン的に医療の現場に必要性を伝えるのみでは実現しない。言い換えれば、単に予算のみを計上して医療の現場に指令しても実現し難い。医療現場を構成するセクターすべてが、意義を共有して実行する、いわばボトム・アップの力が湧き起こらなければならない[4]。それには、前述したアカデミア、さらには、病院や患者などがUHCの概念を理解し、その必要性を認識する必要がある。

参考文献

1.アジア健康構想
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kenkouiryou/kokusaitenkai/kenkokoso_suishin_dai3/siryou1.pdf

2.Akaza H, Kawahara N, Nakagama H, Noda T.
A Multi-Stakeholder Dialogue on Universal Health Coverage for Cancer in Asia - Seeking an Approach to Asia Health and Wellbeing Initiative
Gan To Kagaku Ryoho. 45 (9) :1259-1277. 2018

3.Akaza H, Kawahara N, Nakagama H, kitagawa Y,Noda T.
The 2nd Japan Public-Private Dialogue Forum
A Multi- stakeholder dialogue on Universal Health Coverage for Cancer in Asia; seeking an Approach to Asia Health and Wellbeing Initiative. 癌とKagaku ryoho in print

4.Lancet Editorial
Ensuring and measuring universality in UHC.
Lancet. 393 (10166) :1 ;.2019 Jan 5

■ 詳細は下記をご覧ください。
https://www.uicc.org/news/multi-stakeholder-dialogue-universal-health-coverage-cancer-asia
https://www.uicc.org/news/continuing-quest-uhc-cancer-asia

「日本対がん協会とがんサバイバー支援」

公益財団法人　日本対がん協会会長
垣添　忠生

1.日本対がん協会の活動

日本対がん協会は、がん征圧を国民運動にするのを目的に1958年に設立され、2018年に創立60周年を迎えた。日本で最も歴史のある民間のがん征圧推進団体として、「がんに負けない社会をつくる」を全体目標に、①科学的根拠に基づくがん予防・がん検診の推進②がん患者・家族の支援③がんの正しい知識の普及、の3つを重点施策として、がん対策に取り組んできている。

事業としては、がん予防では「禁煙推進」を中心に据え、世界的な禁煙活動団体「グローバルブリッジ」と提携して禁煙支援に携わる専門人材の育成を進めているほか、18年にはタバコゼロ宣言も発表し、喫煙率ゼロに向け、啓発を続けている。がん検診の推進については、全国42グループ支部で述べ1150万人に実施しているがん検診の実績を生かし、受診率向上の啓発活動や、新たな検診手法の研究にも取り組んでいる。

がん患者・家族の支援では、患者支援のためのチャリティーイベントであるリレー・フォー・ライフを07年から実施してきており、集まった寄付金をもとに若手医師育成の海外奨学医制度やがんの基礎研究への助成、がんの無料相談事業を進めてきている。17年には、協会のサイトに「がんサバイバー・クラブ」を立ち上げ、患者会やイベントの開催、がん関連情報の提供、就労支援の電話相談など、がんサバイバーの「治りたい」「普通の生活がしたい」「大切な人を支えたい」という思いをサポートする活動を続けている。

知識の普及・啓発では、乳がん検診の大切さを伝えるピンクリボンフェスティバルの開催や、副教材の提供などによるがん教育の推進、がん征圧や禁煙ポスターの作成、医療従事者向けの研修など、幅広く取り組んでいる。

こうした活動はすべて個人や企業の皆様からのご寄付に支えられており、国のがん対策と密接に連携しながら、民間の立場を生かして、国の相補完するがん対策に取り組むことで、がんになっても希望を持って暮らせる社会の実現を目指している。

2.全国縦断がんサバイバー支援ウォーク3500Km

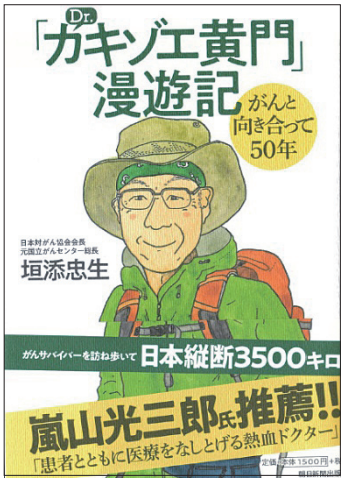
2017年6月、本部内にがんサバイバー・クラブ（GSC）を立上げ、新たな事業を開始した。がんサバイバーは全国に700万人ほどいると思われる。がんと診断されると多くの人々が、強い孤立感、疎外感に苦しみ、再発や転移の不安に怯える。がんの5生率が60%を超えた現在も、残念ながら「がん=死」というイメージが蔓延している。

これを何とかしたい、として立上げたのがGSCである。ところが、秋になっても会員数も寄附も増加しない。GSCの知名度を上げるためにどうしたら良いか思案するうちに、全国がんセンター協議会加盟32施設を一筆描きの様に歩いて訪問して、医療スタッフは勿論、患者会、サバイバーと交流しようと思い立った。

当時76才の私の健康を心配して職員こぞっての反対を押し切り、2018年2月5日、福岡の九州がんセンターを皮切りに、東京を往復しながら7月23日、北海道がんセンターにゴールした。総移動距離3500Kmのうち少なくとも2500Kmは歩いた。4月10日には私も77才を迎えた。各がんセンターで大歓迎を受けた。会員が増え、10年先に100万人となったら、文字通りの国民運動となり、寄附が増加すればサバイバー支援も更に充実する。

10年先には「がんは誰でもかかる普通の病気の一つ」となるよう、国民の意識を変えたいものである。

2019年2月、この記録が「Dr.カキゾエ黄門　漫遊記」と題して朝日新聞社から刊行された。（写真）。私の中学高校同級生の嵐山光三郎君が黄門様と名付けてくれた。



過酷な旅だったが、日本も捨てたものではない、と思える豊かな旅でもあった。本書の印税はすべて日本対がん協会に寄付しますので、多く読んでいただけると嬉しい。

大阪国際がんセンター3年目の春

地方独立行政法人大阪府立病院機構　大阪国際がんセンター
がん対策センター　所長　**宮代　勲**

2017年（平成29年）3月、「大阪府立成人病センター」は森之宮から大手前に移転し、「大阪国際がんセンター」に名称変更しました。大阪府庁や大阪府警察本部と並んで大阪城の西側に位置し、桜の美しい3年目の春を迎えました。

大阪府立成人病センターは、大阪府成人病予防行政の一環として、いわゆる成人病の予防、早期発見およびこれらの調査、研究等を行い、府内における成人病に関する医療水準の向上を図るための中核施設として1959年（昭和34年）に設置されました。

1977年（昭和52年）には、従来の業務に加え、成人病治療の専門病院を260床で開設し、1979年（昭和54年）に現在の病床数500床となりました。

2006年（平成18年）3月、公立病院としては全国初の特定機能病院の承認を受け、4月には地方独立行政法人大阪府立病院機構を設立、独立法人化して事業を移行しました。2007年（平成19年）1月からは、都道府県がん診療連携拠点病院の指定を受けています。現在、総長のもと、病院、がん対策センター（設立当初の調査部が改称）、研究所に、次世代がん医療開発センター、臨床研究管理センターが加わった5つの組織で、理念である「患者の視点に立脚した高度ながん医療の提供と開発」の実践に取り組んでいます。

施設名にある「国際」の冠は、すべての要素を国際レベルに向上させたいという思いによるものです。昨年4月には病院組織に国際部を設置、医療コーディネート企業を介した外国人患者受入れ手続きの標準化などの病院における受入れ体制の整備を進め、外国人受入れ患者数は平成29年度 31名、30年度 97名と増加しています。海外医療機関からの視察や外国人研修の受入、国際医療交流に向けた協定締結、医療及び学術研究の協力関係の構築を進めています（**表1、表2**）。

また、WHO（IARC）の国際活動であるCancer Incidence in Five Continents（CI5）に第3巻（1976年）から、UICCがco-sponsor であるInternational Incidence of Childhood Cancer（IICC）に第1巻（1988年）から、がん対策センターが協力しており、がん生存率の国際比較であるCONCORDプログラムにも当初から関わっています。

URL:
大阪国際がんセンター
http://www.mc.pref.osaka.jp/
大阪がん情報
http://www.mc.pref.osaka.jp/ocr/

表1　国際医療交流に向けた協定締結

2016年 5月	タイ王国　タマサート大学
2016年 6月	バングラデシュ　East West Medical College & Hospital
2016年10月	ミャンマー連邦共和国　ヤンゴン第一医科大学
2016年11月	ロシア連邦チェチェン共和国　国立がんセンター
2017年 6月	ロシア共和国　モスクワ州立学術臨床研究所（MONIKI） （9月と10月に国際交流医療シンポジウムを相互に開催）

表2　外国人研修（平成29年度実績）

消化管内科	香港2名　モンゴル2名　オーストラリア2名　インド2名　ペルー1名　台湾3名
血液内科	韓国2名
病理診断科	カンボジア4名
がん対策センター	アメリカ1名

東札幌病院とUICC

東札幌病院
石谷　邦彦

東札幌病院は「悪性腫瘍に係わる専門病院」の認可を受け、積極的な治療と共に緩和ケアを中心にがん医療に携わっています。毎年札幌市のがん死亡数の約20%を看取っています。当院は北川知行先生のお計らいでUICCに参加させて頂きました。これまでUICCの一員としての活動はほとんどなく申し訳なく思っています。ただ誠実にがん診療に尽くす日々を重ねております。

東札幌病院は2014年から「がん緩和ケアに関する国際会議」Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer (SCPSC) を主催しています。民間病院の能力から3年毎の開催ですが、あるいはUICCの一員としての活動と言えるかと思いご報告する次第です。第2回目が2017年に、そして第3回目を2020年に予定しています。いずれもがん緩和ケアの世界一流の研究者を招請し議論する企画となっており、例えば1stSCPSCは22カ国、800人の参加を得ています。2ndSCPSCも同様の規模でした。

2019年は2020年の3rdSCPSCのプログラム作成に明け暮れていました。優れた研究者の招請とその講演の打ち合わせは2年位前から始めなければならないことはよくご存知と思います。3rdSCPSCのプログラムはすでにホームページ http://www.sapporoconference.com/に公開されています。

ここで少しその内容を紹介いたします。

■開催期日2020年8月21日、22日

シンポジウム1
オピオイドとがんの痛み:進化するその科学と実践

シンポジウム2
なぜ緩和ケアにスピリチュアル・ケアを組み込むことが必要なのか

プレナリーセッション1
オンコロジーと緩和ケアの統合に関する講演4題

プレナリーセッション2
サイコオンコロジーと実存的苦痛に関する講演4題

ランチョンセミナー1
オンコロジーと緩和ケアの統合、その歴史と未来への方向性

ランチョンセミナ-2
緩和医療学の哲学と宗教の関係について

（演者は全て海外からの研究者、完全同時通訳）

この国際会議の開催がUICCの発展に少しでもお役に立つことを願っています。

WORLD CANCER DAY 2019

ワールドキャンサーデー'19での新たな誓い

厚生労働省　健康局　がん・疾病対策課課長【2019年2月4日当時】
佐々木　昌弘

先日、祖母の三十三回忌の法要を済ませた。

私が白衣を着た姿を見るのを楽しみにしていた祖母は、医学部に入る前年にがんで亡くなり、永遠にその約束を果たすことはできなかった。

その後、祖母が亡くなった病院で内科医として患者さんやご家族と接しながら、恐らく世界中で、がんは多くの方の夢を奪い、約束を反故にしていることだろうことを痛感し、私は厚生労働省を生涯の職場に選んだ。

「I AM AND I WILL」私は今、がんが生み出す悲しい現実に対して、行政の視点から立ち向かっている。例えば2017年に閣議決定された第３期がん対策推進基本計画では、重要政策を医療に予防や共生を加えた三本柱にすることにより、多くの方が政策に集ってもらえる拠り所を築いた。

そしてこれから私は、政策の具体化により、仲間を増やし、仲間をつなぎ、仲間が力を持ち寄れる社会づくりに向け、努力を重ねていくつもりだ。

一方、仲間の増やし方などは、場所や時代により変わるものだし、更には一人ひとりによっても最善の方法が変わってくる。

つまり、できるだけ多くの方法を持っていることが不可欠となる。

だが私は悲観していない。求められる様々な方法は、仲間が増えるにつれ増えていくからだ。それだけに、誠意を忘れてはならないし、たゆまぬ努力をし続けないと、得た仲間を失ってしまう。

ここまで書いてきたところで、「まるで高校生の頃に書いた作文のようだなあ」と、我ながら苦笑してしまった。

でも青臭い気持ちで、泥臭い努力で、と思っている今の私の、偽らざる気持ちだ。

これからの私は、２月４日にカレッタ汐留に灯された電球の数だけ、仲間を増やしていく。

本稿をご覧になった皆さんにかれましては、ほんの少しでも気持ちが動いてくださったのであれば、
sasaki-masahiro@mhlw.go.jp
にご連絡いただければ幸いです。共に歩んでまいりましょう。

世界とつながろうSNSキャンペーン

ワールドキャンサーデーでは、公式ハッシュタグをつくりました。

メッセージキャンペーンにご参加いただくことで、自分自身のメッセージを世界中の人へ発信ができ、つながることができます。皆さまのメッセージ1つ1つが、がんの影響を減らすための行動、ワールドキャンサーデーの活動サポートにつながるのです。是非あなたの「I AM AND I WILL（いま私は そして これから私は）」メッセージをSNSにて発信してください。

公式ハッシュタグ
#WorldCancerDay
#IAmAndIWill

facebook　twitter　instagram

メッセージを入力、または手書きのメッセージを写真や動画で撮る。
ハッシュタグをつけて、写真や動画を投稿する。

※公式ハッシュタグをつけて投稿いただいたメッセージは、World Cancer Dayサイト内、https://www.worldcancerday.org/のSocial Wall（ソーシャルウォール）に自動的に掲載される予定でおりますこと、予めご了承ください。

WORLD CANCER DAY 2019

ワールドキャンサーデー

アステラス製薬株式会社　医療政策部長
知原　修

２月４日のワールドキャンサーデーに、UICC日本委員会の主催によるライトアップイベント「LIGHT UP THE WORLD」がカレッタ汐留にて開催され、私も今年初めて参加致しました。当日は風も強くまだ肌寒い中、多くの方々が集まり、まずはカウントダウンで点灯されたUICCのシンボルカラーであるブルーとオレンジのイルミネーションの美しさを堪能致しました。会場のあちらこちらで華やかな会場をバックに写真を撮影する参加者がみられました。

続いて、様々なゲストが登壇され、それぞれのお立場からがんに立ち向かう決意を発信されました。胆管がんサバイバーで、子どもをもつがん患者でつながれるピアサポートサービス「キャンサーペアレンツ」を立ち上げられた西口洋平さん、乳がんを経験された女優の藤山直美さん、小児がんを乗り越えた柔道家の小林咲里亜さんからは、行動を起こすこと、検診を受けること、あきらめず前向きに立ち向かうことの重要性を教えて頂きました。服部学園理事長である服部幸應さんからは煮野菜の摂取など食生活の見直しを推奨頂きました。医療界からは国立がん研究センター理事長の中釜斉先生、UICCアジア地域事務局事務局長の赤座英之先生、UICC日本委員会委員長の野田哲生先生が登壇され、予防や早期診断の重要性を訴えるとともに、がんに関する意識と知識を高めるために引き続き今回のような取り組みを日本において拡大する旨の決意表明がありました。

日本人が生涯でがんに罹患する確率は、ほぼ2人に1人と言われておりますので、誰にとってもがんは他人事ではありません。昨今のめざましい医学の進歩があるとは言え、まずは罹患を避けるため生活習慣を常に改善する努力が必要です。また早期発見・早期治療がいかに重要であるかは多くのデータが示す通りです。そのような基本的な理解を広く世に浸透するために、今回のライトアップイベントは大変有意義だと感じましたし、これからも継続して開催頂ければありがたく存じます。

世界とつながろう　ワールドキャンサーデー

UICC日本委員会広報委員長
河原　ノリエ

がんという病に立ち向かうために、私たちはなにができるでしょうか？

「ワールドキャンサーデー」は世界中の人々ががんのためにできることを考え、行動を起こす日として、2000年2月4日にパリで開催された「がん対策サミット」で誕生しました。

世界においてがんへの認識を高め、教育を改善し、個人、団体、政府の行動を促進することにより、何百万もの予防可能ながんによる死亡を防ぎ、治療とケアへのアクセスがすべてに等しくなる世界を目指す。このUICCの基本理念を世界中で共有するための活動です。

UICC日本委員会では、日本においてUICCに所属する組織や機関をとりまとめ、UICC本部と連携しながら、シンポジウム等を開催するなど、各種の対がん活動を行ってきましたが、その一環としてこのワールドキャンサーデーには力をいれてまいりました。

2019年のワールドキャンサーデーからは、3年間続く新しいキャンペーンがスタートしています。今期のテーマは「I AM AND I WILL　私は今、そしてこれから私は」。人は誰であれ、自分自身、愛する人、世界のひとびとのために、がんに立ち向かう力をもっています。このキャンペーンは、そのひとりひとりが、自分自身としてがんという病のためになにができるかを伝え合おうというキャンペーンです。UICC日本委員会ではワールドキャンサーデーのWEBhttps://worldcancerday.jp/を開設し、公式ハッシュタグの「#WorldCancerDay」「#IAmAndIWill」で投稿頂いたメッセージは、UICC本部WEBサイト内のソーシャルウォールに掲載されるようになっています。がんという病への世界中の想いが、このハッシュタグによって、つながり紐づけられていく。情報テクノロジーと、ひとびとの想いが共進化していくSNSキャンペーンは、さまざまな想いを喚起させ、対がん活動の在り方を大きく変えています。

UICCでは毎年、この2月4日の夜空をUICCカラーのブルーとオレンジの光に包むライトアップを世界各地で行います。UICC日本委員会では、カレッタ汐留の御協力のもと、昨年同様、ライトアップイベント「LIGHT　UP　THE　WORLD」を開催しました。喜劇女優の藤山直美さんらにきていただいて、がんに立ち向かう決意を語っていただきました。「私は喜劇女優です。そして笑いでがんを吹き飛ばします。」という乳がんサバイバーとしての藤山さんのメッセージが、ブルーとオレンジに彩られた夜空に、勇気を届ける力となって突き抜けていきました。今回、多くのメディアにもとりあげられ、SNSによって世界中に発信することもできました。想いを発信し、それが届いて、ひとの心を動かすことによって、なにかが変わる。それぞれが、それぞれの人生の役回りのなかで、この病と向き合う決意を真摯に語り、この光のもとで分かち合えた瞬間を共有できたことは、UICC日本委員会活動の大きな力となりました。

2000年に設立されたワールドキャンサーデーは、次の2020年2月4日には、20周年の節目となります。「I AM　AND　I WILL」というコアコンセプトに基づいて、世界のひとびとの想いをつなげることを通じて行われたこれまでを振り返り、あらたに、この病と向き合う決意を世界で繋げていかなくてはなりません。この20年、がん医療は飛躍的に進歩した一方、がんは急増しており、世界中で新たな社会課題となっています。

2020年のワールドキャンサーデーでは、20周年の機会を利用して、がん対策の進捗状況に焦点を当てると同時に、世界のひとびとの役割とその各人の行動がどのようにこの進捗を加速させていくことができるのかということを、この時代状況の中で考える機会となります。それはまさに、グローバルヘルスコミュニティーがどのような役割を果たすことができるのかという政策の在り方、UICC日本委員会が世界とつながりながら活動をすることの意味への問いかけとなりそうです。

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター
神奈川県立がんセンター
(公財)がん研究振興財団
国立がん研究センター
(公財)札幌がんセミナー
千葉県がんセンター
新潟県立がんセンター
(公財)日本対がん協会
(公社)日本婦人科腫瘍学会
三重大学医学部附属病院
(一社)アジアがんフォーラム
がん・感染症センター都立駒込病院
(公財)がん集学的治療研究財団
埼玉県立がんセンター
静岡県立静岡がんセンター
東京慈恵会医科大学
日本癌学会
(一社)日本乳癌学会
東札幌病院
宮城県がんセンター
大阪国際がんセンター
(公財)がん研究会
九州がんセンター
(公財)佐々木研究所
(公財)高松宮妃癌研究基金
栃木県立がんセンター
(一社)日本癌治療学会
(特非)日本肺癌学会
(公財)北海道対がん協会

賛助会員　協和発酵キリン株式会社(山極ー吉田国際奨学金)
(公社)日本放射線腫瘍学会

UICC日本委員会　2019年度役員

委員長　野田　哲生(がん研究会)

幹　事
- 総　務　中釜　斉(国立がん研究センター)
- 学　術　垣添　忠生(日本対がん協会)
- 財　務　吉田　和弘(岐阜大学大学院医学系研究科)
- ARO 担当　赤座　英之(東京大学大学院情報学環)
- 予防・疫学領域担当　浜島　信之(名古屋大学大学院医学系研究科)
- 事務局担当　大野　真司(がん研究会有明病院)

監　事　増井　徹(国立精神・神経医療研究センター)
池田　徳彦(東京医科大学)

専門委員会委員長
- 疫学予防委員会　浜島　信之(名古屋大学大学院医学系研究科)
- 喫煙対策委員会　望月友美子(日本対がん協会)
- 患者支援委員会　北川　雄光(慶応大学医学部)
- TNM 委員会　佐野　武(がん研究会有明病院)
- 広報委員会　河原 ノリエ(東京大学大学院情報学環)
- 小児がん委員会　中川原　章(佐賀県医療センター好生館)
- 対がん協会　坂野　康郎(日本対がん協会)

UICC-AsiaRegionalOffice (ARO)
赤座　英之(東京大学大学院情報学環)

UICC 本部
- Fellowship 委員　中釜　斉(国立がん研究センター)
- TNM 委員　淺村　尚生(慶応大学医学部)

アジア・太平洋癌学会 (APFOCC)
赤座　英之
(東京大学大学院情報学環)

アジア・太平洋がん予防機構 (APOCP)
Malcolm A. Moore

名誉会員
- 杉村　隆(元国立がん研究センター、日本学士院)
- 井口　潔(元がん集学的治療研究財団)
- 青木　國男(元愛知県がんセンター)
- 富永　祐民(元愛知県がんセンター)
- 大島　明(元大阪府立成人病センター)
- 武藤徹一郎(がん研究会)
- 北川　知行(がん研究会)
- 田島　和雄(元愛知県がんセンター、三重大学)

日本委員会事務局(がん研究会内)
- 神田　浩明(研究:幹事会担当)(埼玉県立がんセンター)
- 関本　敏之(事務:委員長業務補佐)

2020 年度の UICC 日本委員会総会は
7 月 18 日(土)　12:00 - 14:30 に
経団連会館で行われます。

UICC ホームページ:www.uicc.org
UICC 日本委員会ホームページ:www.jfcr.or.jp/UICC
UICC-ARO ホームページ:http://uicc-aro.org/